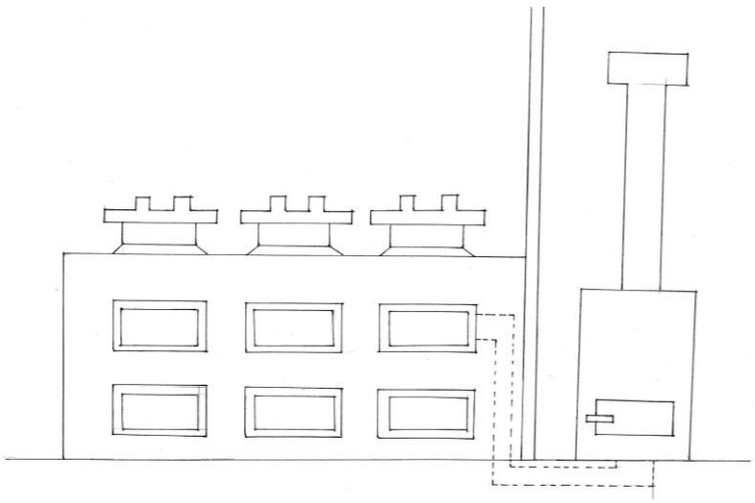
■ 竈（かまど）の排煙

中村家のかまどは、焚口と灰取り口のみが設けられた構造となり、薪の燃焼で生じた煙は焚口から煙道に排出され、地下を通って屋外に設けられた煙突から屋外に吐き出されるようになった。屋外に煙を排出させることは、平安期に一度普及した。庶民の住居が竪穴式から掘立柱建物に移行するにしたがい、煙道が失われた。竈は焚口と鍋釜をしかける穴のみが設けられた構造となり、薪の燃焼で生じた煙は焚口から屋内に排出され、屋根裏を通って屋根に設けられた「煙出し」の穴から屋外に吐き出されるようになった。高温多湿な気候の日本において家屋を腐朽やシロアリから守るため、かまどから屋内に煙を吐き出させ、屋根材や家屋を燻製にし、防腐効果を狙う必要があったためである。煙突が日本の竈に復活したのは、西洋文明が大規模に渡来した明治時代以降になってからだった。



■ぬかかまど
（写真 1）→

■七輪
←（写真 2）

■ガスコンロ
（写真 3）→

● 加熱器具の変遷 ●

加熱器具も知恵と科学の発展により形を変えてきた。写真 1 は「ぬかかまど」という。昭和 20～30 年代に使用された。一般的な竈は住宅の一部となっており移動が困難である。それに対しぬかかまどは移動が可能である。写真 2 は「七輪」で、昭和 40 年代まで一般的に広く普及していた。主に焼く用途で使用された。写真 3 は「ガスコンロ」で、昭和 30 年代頃から現在も使用されている。